

呉伐に関わる人物伝を読んでみる～『晋書』王濬伝（1）

王濬字士治，弘農湖人也。家世二千石。濬博涉墳典，美姿貌，不修名行，不為鄉曲所稱。晚乃變節，疏通亮達，恢廓有大志。嘗起宅，開門前路廣數十步。人或謂之何太過，濬曰：「吾欲使容長戟幡旗。」眾咸笑之，濬曰：「陳勝有言，燕雀安知鴻鵠之志。」

（王濬、字は士治、弘農湖の人なり。家世は二千石。濬、博く墳典を渉り、姿貌美しく、名行を修めず、郷曲稱する所とならず。晩に乃ち變節し、疏通亮達、恢廓で大志有り。嘗て宅を起し、門前に路数十歩の廣さを開ける。人、或いはこれを謂いて何ぞ太すぎんや、濬曰く「吾、長戟幡旗を容れしむるを欲す。」衆、咸これを笑う、濬曰く「陳勝の言有り、燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや。」）

訳：王濬、字は士治といい、弘農郡湖の人である。二千石の家柄であった。王濬は広く古書を読みあさり、姿かたちが美しく、名声と品行が良くなく、地方で評判を得ることができなかった。年を取ってから変化し、道理に通じ、度量が広く、大志を抱いた。家を建てる時、門前に数十歩の廣さの道を開けた。ひとびとは、これはいくら何でも道が太すぎないかと言ったが、王濬は「私は武器や旗をここに入れてたいと思っている」と言った。皆これを笑ったが、王濬は「陳勝の言葉があるだろう、燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや、と」と言った。

補注：『史記』卷四十八 陳涉世家第十八「陳勝者，陽城人也，字涉。吳廣者，陽夏人也，字叔。陳涉少時，嘗與人傭耕，輟耕之壟上，悵悵久之，曰：「苟富貴，無相忘。」庸者笑而應曰：「若為傭耕，何富貴也？」陳涉太息曰：「嗟乎，燕雀安知鴻鵠之志哉！」」

『漢書』陳勝傳「陳勝 字涉，陽城人。吳廣，字叔，陽夏人也。勝少時，嘗與人傭耕。輟耕之壟上，悵然甚久，曰：「苟富貴，無相忘！」傭者笑而應曰：「若為傭耕，何富貴也？」勝太息曰：「嗟乎，燕雀安知鴻鵠之志哉！」」

州郡辟河東從事。守令有不廉潔者，皆望風自引而去。刺史燕國徐邈有女才淑，擇夫未嫁。邈乃大會佐吏，令女於內觀之。女指濬告母，邈遂妻之。後參征南軍事，（斟注1）羊祜深知待之。祜兄子暨白祜：「濬為人志太，奢侈不節，不可專任，宜有以裁之。」祜曰：「濬有大才，將欲濟其所欲，必可用也。」轉車騎從事中郎，識者謂祜可謂能舉善焉。

「州郡に辟され河東從事となる。守令、廉潔ならざる者有り、皆風を望み自ら引きて而して

去る。刺史燕国の徐邈に女有りて才淑たり、夫を択び未だ嫁さず。邈乃ち大いに佐吏と會し、内においてこの女に觀せしむ。女、濬を指し母に告げ、邈ついにこれを妻とす。後に參征南軍事となり、羊祜深知し、これを待つ。祜の兄子暨、祜に白す「濬の為人、志は太く、奢侈は節せず、專任はすべからず、宜しく以てこれを裁有るべし。」祜曰く「濬に大才有り、將に其の欲する所を濟うを欲す。必ず用いるべきなり」轉じて車騎從事中郎となる、識者謂うらく、祜、能く善を擧げるといふべけんや。」

訳：州郡に招かれて河東從事となった。太守・県令で清潔でない者は、皆うわさを聞いて辭職して去った。刺史である燕の国の徐邈には才能が有り貞淑な娘がいたが、夫を選び好みし未だに結婚していなかった。徐邈は自分の配下を集め、帳の内でのこの娘に配下を見せた。娘は王濬を指さし母親に告げたので、徐邈は王濬と娘を娶わせた。後に參征南軍事となり、羊祜はその人となりをよく知っていたので、これを待っていた。羊祜の兄の子、羊暨は羊祜に言った。「王濬の人となりは、志は大きいですが、浪費家で任せられません。ひとりで仕事を任せてはいけません。その上で判断してください。」羊祜は言った。「王濬には大きな才能がある。私はその才能を救いたい。必ず用いるべきだ。」轉出して車騎從事中郎となった。識者は、羊祜は長所をよく見抜き用いた、と言った。

勘注1：讀史舉正曰案本紀咸寧二年十月羊祜為征南將軍而濬遷益州刺史在誅張弘後時為泰始八年然則濬所參非征南也

（『讀史舉正』曰く、案ずるに、本紀咸寧二年十月、羊祜征南將軍と為る。而して濬、益州刺史に遷るは、在して張弘を誅した後、時泰始八年と為す。然るに則ち、濬が參じた所は征南に非ず也。）

訳：『讀史舉正』が言うことには、「考えると、武帝紀の咸寧二年十月に羊祜が征南將軍となったと書かれている。しかし王濬が益州刺史となったのは、益州にいて、張弘を誅殺した後、それを泰始八年としている。つまり、王濬が羊祜のもとに赴いたのは征南將軍の時ではないのではないか。」

補注：『讀史舉正』卷四王濬傳「參征南軍事案本紀咸寧二年十月羊祜為征南將軍而濬遷益州刺史在誅張弘後時為泰始八年然則濬所參非征南也」

補注：『晋書』卷三紀第三世祖武帝「(泰始五年二月) 壬寅，以尚書左僕射羊祜都督荊州諸軍事，征東大將軍衛瓘都督青州諸軍事，東莞王佃鎮東大將軍、都督徐州諸軍事。」

「(泰始八年) 夏四月，置後將軍，以備四軍。六月，益州牙門張弘誣其刺史皇甫晏反，殺之，傳首京師。弘坐伏誅，夷三族。」

「(咸寧二年) 冬十月，以汝陰王駿為征西大將軍，平南將軍羊祜為征南大將軍。」

補注：『晋書』卷二十四志第十四職官「郡皆置太守，河南郡京師所在，則曰尹。諸王國以內史掌太守之任，

又置主簿、主記室、門下賊曹、議生、門下史、記室史、錄事史、書佐、循行、幹、小史、五官掾、功曹史、功曹書佐、循行小史、五官掾等員。郡國戶不滿五千者，置職吏五十人，散吏十三人；五千戶以上，則職吏六十三人，散吏二十一人；萬戶以上，職吏六十九人，散吏三十九人。郡國皆置文學掾一人。」

「州置刺史，別駕、治中從事、諸曹從事等員。所領中郡以上及江陽、朱提郡，郡各置部從事一人，小郡亦置一人。又有主簿，門亭長、錄事、記室書佐、諸曹佐、守從事、武猛從事等。凡吏四十一人，卒二十人。諸州邊遠，或有山險，濱近寇賊羌夷者，又置弓馬從事五十餘人。徐州又置淮海，涼州置河津，諸州置都水從事各一人。涼、益州置吏八十五人，卒二十人。荊州又置監佃督一人。」

「四征鎮安平加大將軍不開府、持節都督者，品秩第二，置參佐吏卒、幕府兵騎如常都督制，唯朝會祿賜從二品將軍之例。」

「驃騎、車騎、衛將軍、伏波、撫軍、都護、鎮軍、中軍、四征、四鎮、龍驤、典軍、上軍、輔國等大將軍，左右光祿、光祿三大夫，開府者皆為位從公。」「諸公及開府位從公者，品秩第一，食奉日五斛。」「諸公及開府位從公加兵者，增置司馬一人，秩千石；從事中郎二人，秩比千石；主簿、記室督各一人；舍人四人；兵鑿、士曹，營軍、刺姦、帳下都督，外都督，令史各一人。」

補注：『三国志』魏書第二十七徐邈傳「徐邈 字景山，燕國薊人也。」「明帝以涼州絕遠，南接蜀寇，以邈為涼州刺史，使持節領護羌校尉。」

補注『晋書』卷三十四列傳第四羊祜「帝以祜兄子暨為嗣，暨以父沒不得為人後。帝又令暨弟伊為祜後，又不奉詔。帝怒，並收免之。」

除巴郡太守（鬪注2）。郡邊吳境，兵士苦役，生男多不養。濬乃嚴其科條，寬其徭課，其產育者皆與休復，所全活者數千人。轉廣漢太守，垂惠布政，百姓賴之。濬夜夢懸三刀於臥屋梁上，須臾又益一刀（鬪注3），濬驚覺，意甚惡之。主簿李毅再拜賀曰：「三刀為州字，又益一者，明府其臨益州乎？」（鬪注4）

「巴郡太守に除せらるる。郡邊は吳に境し、兵士は苦役し、男を生むも多くは養えず。濬、乃ちその科條を嚴にして、その徭課を寛とす。その産育する者は皆與に休復せしむ、全活する所の者数千人となる。転じて廣漢太守となる。恵みを垂れる政を布き、百姓これを頼りとす。濬、夜夢にて三刀、臥屋の梁上において懸る、須臾、また一刀益す、濬、驚きて覚める、意、甚だしくこれを悪む。主簿李毅、再拜して賀して曰く「三刀は州の字を為す、また一つ益すは、明府、それを益州に臨むや？」」

訳：巴郡太守となった。郡の境界は吳に接しており、兵士は苦役であり、子供を産んでも養えなかった。王濬は規則を厳格に運用し、租税などの負担を軽くした。このことにより子供

を産み育て、人口が回復し数千人になった。転任して廣漢太守となった。その行政は恵みを与え、百姓は王濬を頼りにした。王濬は夜の夢で三本の刀が寝室の梁の上にかかっているのを見た。わずかの間にまた一本の刀が増え、王濬は驚いて目を覚ました。気分は大変悪かった。主簿の李毅は再拝して祝った。「三刀というのは州の字を表している。また一本増えたのは、との、益州に榮転するのでは？」

斟注2：『御覽』五百十二『三十國春秋』曰「羊祜都督荊州，鎮襄陽。時祜有平吳之志，方樹基址，擢王濬為巴郡太守，將委以巴峽之任。祜兄子暨謂祜曰「觀濬為人，志大者侈，不可專任。」祜曰：「有大才，必可用也。」識者曰祜可謂能舉善矣，知人則哲，叔子之謂乎。」

（『御覽』五百十二『三十國春秋』曰く「羊祜、荊州を都督し、襄陽に鎮す。時、祜に平吳の志有り、樹を方べ基址となし、王濬を擢きて巴郡太守と為し、將に巴峽の任を以て委ねんとす。祜の兄の子暨、祜に謂いて曰く「濬の為人を觀るに、志は大きくも侈り、専ら任ずるべからず。」祜曰く「大才有り、必ず用いるべし。」識者曰く「祜、能く善を挙げると謂うべし。人を知る則ち哲、叔子を謂わんや。」）

訳：『太平御覽』卷五百十二『三十國春秋』が言うには、羊祜は荊州において軍政を統括し、襄陽に在った。時に、羊祜には平吳の志があったので、木材を並べて土台として、王濬を抜擢して巴郡太守として、巴峽の軍政の任を委ねた。羊祜の兄の子の羊暨は羊祜に言った。「王濬の人格を觀察すれば、志は大きいですが、驕りがあり、一人で仕事を任せてはなりません。」羊祜は言った。「大きな才能があるから、必ず仕事をさせなければならない。」有識者は言った。「羊祜はよく長所を挙げて用いたというべきである。人を知ることについて道理にかなっている、これは羊祜のことを言っている。」

補注：『太平御覽』卷五百十二宗親部二伯叔『三十國春秋』曰「羊祜都督荊州，鎮襄陽。時祜有平吳之志，方樹基址，擢王濬為巴郡太守，將委以巴峽之任。祜兄子暨謂祜曰：「觀濬為人，志大者侈，不可專任。」祜曰：「有大才，必可用也。」識者曰祜可謂能舉善矣，知人則哲，叔子之謂乎」

斟注3：『書鈔』一百二十三陸機『晋紀』曰「王濬之在巴郡夢懸四刀於上」

（『書鈔』一百二十三陸機『晋紀』曰く「王濬の巴郡に在る夢、四刀上に於いて懸る。」）

訳：『北堂書鈔』一百二十三の中にある、陸機著の『晋紀』が言うには「王濬が巴郡にいたときに見た夢は、四本の刀が上部に懸っているというもの」

斟注4：『書鈔』一百二十三陸機『晋紀』曰「夫三刀為州而見四為益一也明年其當益州乎。」

『類聚』六十引陸機『晋書』李毅誤作李毅。『華陽国志』十一曰「李毅，字允剛，廣漢郵人。

少散達，不治素檢。年二十餘，乃詣郡文學受業，通『詩』、『禮』訓詁。為學主事。太守弘農王濬臨學講試，奇之，命為主簿。濬嘗夢得三口刀，云人以禾益之，手持，不得。以問郡丞與

掾吏，莫能知。毅對曰「吉祥也。三刀者，州字，而益之。禾持不得，禾傍失者秩字。明府秩當至益州。」濬笑曰「如卿言，當相以為秀才。」『札樸』曰「州本不從刀因班辨從刀隸作○似州之半體故謂州為三刀慕容詳時童謡云「八井三刀卒起來」議者謂「魏師盛於冀州」此亦以三刀為州。

（『書鈔』一百二十三陸機『晋紀』曰く「夫れ三刀で州を為す、而して四を見る、益で一を為す也。明年、其れ當に益州（?）。」『類聚』六十に引く陸機『晋書』李毅を誤り李穀に作る。

『華陽国志』十一曰く「李毅、字は允剛、廣漢郡の人。少くして散達、素檢治まらず。

年二十余り、乃ち郡に詣でて文学を受業し、『詩』、『禮』の訓詁に通じる。学主事と為る。太守弘農王濬、学講試に臨み、これを奇として、命じて主簿と為す。濬、嘗て三口の刀の夢を得る、禾を以てこれを益すと人が云い、手に持るも得ず。以て郡丞と掾吏に問う、能く知る莫し。毅對して曰く「吉祥なり。三刀は州の字、而してこれ益。禾を持ち得ず、禾の傍を失うは秩の字。明府の秩、當に益州に至るべし。」濬笑いて曰く「卿の言うが如く、當相以為秀才（?）」『札樸』曰く「州、本は班・辨に因りて刀に従わず、州の半體に似る○を作り隸いて刀に従う。故に謂う、州は三刀を為す。慕容詳の時に童謡に云う「八井三刀、卒に起來す」議者は謂う「魏師、冀州に於いて盛ん」此れ亦三刀を以て州と為す」

訳：『北堂書鈔』一百二十三に引く陸機著『晋紀』が言うには「それは、三本の刀で州という文字を為しているが四本見ている。これは「益」一本を示しているからである。」明くる年、それはまさに益州のことであったと。『藝文類聚』六十に引用される陸機『晋書』は李

毅を誤って李穀としている。『華陽国志』十一が言うには「李毅、字は允剛、廣漢郡郿県の

人である。若いころはぶらぶらとして、質素な生活ではなかった。年齢が二十越えた頃、郡の学問所（?）に通い文学を学んで、『詩経』、『禮記』の字義に通じた。学主事となった。

（廣漢）太守の弘農郡の人、王濬は学講試に臨席し、李毅を優れているとして、主簿となるよう命じた。王濬は以前、三本の刀の夢を見ていた。禾によって刀を増やすよう言われ、手に取るも、得ることができなかった。そこで郡丞と掾吏にも尋ねてみたが、知っているも者いかなかった。李毅は對して言った。「吉祥です。三刀は州の文字を意味し、これを益せと。禾のつくりを失ったものは秩の文字です。との官職が益州へと遷るのでしょう。」王濬が笑って言うことには「君の言うように、（?）」『札樸』が言うには「州の文字は、本来は班や辨のように刀は入っていないが、州の文字の半分に似ている○を為している（?）そういった理由で、州の文字は三つの刀で構成されているとする。慕容詳の時代に童謡で歌われた「八井三刀、とうとう立ち上がる」論者が言うことには「魏の出兵は冀州において盛んである」これもまた、三本の刀によって州としている。」

補注：『北堂書鈔』卷一百二十三「夢懸四刀臨益州」陸機晉記云王濬之在巴郡夢懸四刀於上甚惡之濬命主簿李毅毅拜賀曰夫三刀為州而見四為益一也明年其當益州乎○王石華校刪濬下之字非也今案類聚六十引說作書

有之字無巴字無命字無下一毅字年作府餘同又卷七十九引命作問御覽三百九十八引作陸機晉書武紀年亦作府陳本已改問字改府字餘與本鈔同」

『藝文類聚』卷六十軍器部刀「陸機《晉書》曰：王濬之在郡也。夢懸四刀於其上，甚惡之，濬主簿李毅。拜賀曰：夫三刀為州，而見四，益一也。明府其臨益州乎」

『華陽國志』卷十一「李毅，字允剛，廣漢郵人也。祖父朝，字偉南，州別駕從事。父旦，字欽宗，光祿郎中、主事。毅少散達，不治素檢。年二十餘，乃詣郡文學受業，通『詩』、『禮』訓詁。為學主事。太守弘農王濬臨學講試，問祭酒姬豔曰：「學中有可成進幾百人？」豔對曰：「可有百人。」濬怒言：「童冠八百，而成者百人。教少何為？」毅對曰：「如豔之言，明府之教盛於孔氏，不為少也。」濬奇之，命為主簿。濬嘗夢得三口刀，云人以禾益之，手持，不得。以問郡丞與掾吏，莫能知。毅對曰：「吉祥也。三刀者，州字，而益之。禾持不得，禾旁失者秩字。明府秩當至益州。」濬笑曰：「如卿言，當相以為秀才。」

補注『晉書』卷一百二十七載記第二十七 慕容德「時魏師入中山，慕容寶出奔于薊，慕容詳 又僭號。會劉藻自姚興而至，興太史令高魯遣其甥王景暉隨藻送玉璽一紐，并圖讖祕文，曰：「有德者昌，無德者亡。德受天命，柔而復剛」。又有謠曰：「大風蓬勃揚塵埃，八井三刀卒起來。四海鼎沸中山積，惟有德人據三臺。」於是德之羣臣議以 慕容詳僭號中山，魏師盛于冀州，未審寶之存亡，因勸德即尊號。」